



山本周五郎全集

第三卷

講談社



山本周五郎全集

---

第3卷 菊千代抄

昭和39年3月20日 第1刷発行

定 価 480円

著 者 山本周五郎

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京3930

© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

紅梅月毛

三

晩秋

二

野分

三

ひやめし物語

七

山椿

七

妹の縁談

五

湯治

二五

おたふく

一三

落ち梅記

一五

桑の木物語

一九

いさましい話

三

菊千代抄

二七一

思い違い物語

三〇七

嘘アつかねえ

三二五

雨あがる

三六五

ぼろと釵

三八九

よじょう

四〇五

四人囃し

四二九

砦山の十七日

四四五

燕

四七三

解説 山本健吉

四九

デザイン 伊藤憲治

カメラ 秋山青磁

紅  
梅  
月  
毛



慶長十年二月はじめの或日、伊勢のくに桑名城のあるじ本多中務大輔忠勝の家中で、馬術に堪能といわれる者ばかり十六人が城へ呼ばれた。

深谷半之丞もそのひとりだった。かれが登城して遠侍へはいると、そこにはもう殆んどみんな集って、さかんに馬のはなしをしているところだった。それでかれはいつものように片隅へ坐って、黙って人人のはなしを聴いていた。

「馬についてはわれらの殿にたくさん逸話がある」  
松野権九郎がそう云いだした。

「小牧山の合戦のときだったが、永井与次郎どのが乗り損じて落馬した、馬はそれとびあがりどびあがり敵のほうへと奔ってゆく、永井どのはすぐ追いかけたが徒だちだからとても及ばない、と見るなり、殿は御乗馬にひと鞭あてて永井どのを追いぬき、それ馬をひっしと敵勢の中へ追いかんだうえ取り戻しておいでになった」

「そうだ、あのときは敵兵も齒嚙みをして、憎き本多がふるまいかな、とずいぶん口惜しがったそうだ」

「また関ヶ原のときにもある」権九郎はつづけて云った。

「九月十五日の戦はお旗まわり四百騎の少数で先陣をあそばされたが、一戦のはじめに流れ弾丸で御乗馬が斃された、お乗り替はない、どうなさるかと思つたら、殿には傍にあった石へ悠然とお腰をかけてしまわれた。箭弾丸の飛

んで来る戦場のまん中で、こう……悠然と石に腰をかけて待つておいでになる、そこへ井伊どのの老臣で木俣土佐と

いう者が馬を煽つて来た、殿には大音に呼びとめて、馬を貸し候えと仰せられたが、相手も合戦のまつただ中で馬をゆずるわけにはいかない、お貸し申すこと相かなわらず、と答えていつてしまった、五人までそうやつてお呼びとめあそばしたそうだ、あとで將軍（家康）が、足でも萎えたか、とお笑いなされたら、『足は萎えませぬが平八郎忠勝ともあるものが徒だちの戦をしては御名にかかりまするので』とお答え申上げられたとのことだ」

「そのとき殿がお呼びとめあそばした者のなかに深谷半之丞もいたんだ」田中善左衛門という者がそう言葉を挿はさんだ、「かれも殿にその馬貸せと呼びとめられた、ところがかれは見向きもせず、御免候えと云ったきり駆去つてしまった」

「いや、あれにはわけがある、あのとき深谷は敵の侍大将を追い詰めていたんだ」

「そうだ、鷲津対馬をひっしと追い詰め、馬を合せたとみるなり一槍で突き落とした、実にあざやかな突きだった、なにしろあれはお旗まわり随一の兇首だったからな」

「そのとき深谷どのの乗つておられたのは名馬だったそうですね」

若侍のひとりが下座のほうからそう訊ねた。

「たいそう珍らしい毛並だったそうですが」



「あれは紅梅月毛というのだ」渡辺弥九郎がひきとつて答えた、「月毛というのは元来はつきという鳥の羽色からきたもので、今の鶉色のちょっと濃いのをいうのだが、深谷のはそれに紅をかけたような毛並だった、いまそこで云うように鷲津との一戦はみごとなものだったが、あの馬がまたとびぬけて良かった、こう突っ込んでいったのしかかった時のすがたはまるでそのまま敵を呑んでしまうかと思われた」

「それでその馬はどうしたのですか」

「惜しいことに深谷が鷲津対馬のしるしをあげているうちにそれしてしまった、あれなどは正しく名馬といふべきだつたらうのに、残念なことをした」

はなしはひとしきり紅梅月毛に集った。

それは半之丞が慶長五年二十二歳のとき関ヶ原の合戦に乗った馬で、かれはその戦に兜首二級のほか十余騎を討ち、当日の功名帳では上位につく手柄をたてたのであるが、馬は流弾にでもやられたものか、戦場の混乱のなかへそれのまま戻らずじまいだったのである。

「いや、あれは名馬ではなかった」松野権九郎が頭を振りながら云った、「おれはよく知っているが、あれはごくあたりまえな平凡な馬だった、深谷は乗るのも抜群だが飼うのはさらに上手で、ごく平凡な馬だったのをあれまでに育てあげたのだ、しかしまず駿足というところだろう、決して名馬などではなかったよ」

「それは深谷も自分で云っているな、われわれには駿足くらいが頃あいだ、それ以上の馬は飾り道具だと、……だが紅梅月毛は名馬といってもそれほど不当ではなかったよ」

こうして一座の話題の中心になっているのに、当の深谷半之丞は隅のほうに坐ったまま黙っていた。かれの無口は名だかいもので、こういう座談などには決して加わったことがないから、まわりの者もしぜんと馴れてしまい、今ではかれがいてもいなくても、平気でかれの評判をするようになっていたのである。

「ご一同お縁側へ」

間もなく近習番の侍がそう伝えに來たので、かれらは衣紋をかいつくろいながら速待から出ていった。

## 二

本多忠勝はそのとき五十八歳だった。生涯に五十七たびも戦場へ臨み、なんども生死の境をくぐって來たが、身にはかすり疵ひとつ受けなかったという、近頃は自分でも「寸が詰った」と苦笑するとおり、ぜんたいの感じが枯れてきたようであるが、それが却って奥底の深いしみじみとした風格となつて、どうかすると俗塵を超越した老僧のような印象を人に与えるのだった。

「これはまだ内聞ではあるが、ちかちかうち將軍家において大切な御祝儀がある」忠勝は低いさびのある声で云つた、「そのおり伏見城の大馬場において馬競べを催すゆえ、

譜代の家中よりおのおの一騎ずつ選んで出すようにとの御内達があった、……それで当城からも一名だけ選びだすわけであるが、一代名譽の催しといい、此処に集った者はいずれも馬術堪能で、おれから誰とも指名がしにくい、そこで誰にも不平のないよう、そのほう共から札を入れて、最も数多く入った者をそれに当てようと思う、もしこれに異存のある者は遠慮なく申し出るがよい」

みんなにわかには膝を固くした。近いうち家康が秀忠に世をゆずるといふ噂はかねて聞いていた、それは前年の六月はじめて西国諸侯が江戸へ証人を送った頃からの噂で、「大切な御祝儀」というからにはそれが事実となるに違いない、そうだとすれば正しく一代名譽の催しである、われこそ、と思わぬ者はなかったであろう、忠勝はそれを察して入れ札という方法をとったのだ。

誰にも異存はなかった、そこですぐ近習番の者が用意してあった筆紙を運び、十六人はそれぞれ順に札を入れた。すっきり済んで札が集ると、忠勝が自分でそれを読みあげた。

「……深谷半之丞」

まずはじめが半之丞だった、次ぎもそうだし三枚めもおなじだった。

忠勝は苦笑しながら「だいぶ半之丞に人気があるな」そういつて読みつづけた。

ところが松野権九郎に一枚はいったきりで、あとの十五

枚はみんな半之丞だった。

「ほう」みんな自分で入れながらやっぱりそうかと思つた。忠勝も予想はしていながらそれほど気が揃おうとは考えなかつたのでちよつと眼を瞪つた。

権九郎ひとりはなにやら腑におちぬようすで、

「わたくしのは一枚きりでございますか」と首を傾げながら訊いた。

「そうだ、なにか不審があるのか」

「いや、不審ということはありませんが」

そう云いながらなにか未練のありそうな眼つきをしているので「三枚や五枚あつても深谷とは勝負にはならんぞ」と云う者があり、みんなくすくす笑いだした。

「……さて半之丞」忠勝はかたちを改めて云つた、「これで馬競べに出るのはそのほうときまつた、桑名一藩の名代ともいふべき役目だ、まだ時日はあるから充分に稽古をして置くがよい、それからもし家中の馬で気に入つたものがあつたら、誰の持馬でも遠慮なく乗つてよいぞ、その旨はすでに老職へ申し達してあるから」

半之丞は平伏してお受けをしたが、さして感動したようすもなく、みんなと一緒に御前をさがつた。

遠侍へ来るともう早速「おれの馬に乗つて呉れ」という申込みがはじまつた。

「拙者の脊黒は南部産の五寸（馬の丈を計るのに四尺より三寸までをスンで数え四寸より七寸までをキという）で駈

けの速さは格別だ、是非とも拙者の馬に乗って呉れ」

自分のは木曾産の逸物だ、おれのは三春の駿馬だといって、聞き伝えた者がつきつぎとせがんできた。一代晴れの競べ馬だし乗りてが半之丞だから、自分の馬で勝たせたいと思うのは人情に違いない、だが半之丞は漠然たる顔つきでうんともおうとも云わず、時刻になるとさっさと城を退出してしまつた。

深谷の家は武家屋敷のはずれにあり、すぐ裏に揖斐川の流が見えている、門をはいると正面が住居で、左へかなり広い庭がひらけ、一棟の家士長屋が建っている、その長屋と鍵の手になるかたちで住居にくつつけて厩があつた。

帰つて来た半之丞は住居へははいらないで、庭を横切つて厩のほうへいった。そこでは今しも十七あまりになるひとりの娘が、馬盥にぬるま湯をとつて馬のすそを洗つてるところだつた。

「お婦りあそばしませ」

近寄つて来る半之丞をみると、娘は急いで裾をおろしながら立つて会釈した。

襷もはずそうとしたが、半之丞は手まれて制して馬のそばへ寄り、平首のあたりをそつと叩いた、それは二寸あまりの鹿毛で、どこという特徴もないごくありふれた馬だつたし、十日ほどまえから腹を悪くしているので、眼の色も濁り毛並に艶がなく、ぜんたいにひどくみすばらしい感じだつた。

「千葉の湯ですそをしたらよいと伺いましたので、今ためしてみたところでございます」

娘がそう云つた。

半之丞は黙つて厩の中へはいつてゆき、寝蓐を掻きまわしたり、排泄物の匂いを嗅いでみたりした。娘は片手で馬の脇腹を撫でながら、吸いつけられるような眼で半之丞のうしろ姿をじつと見まもつていた。

### 三

娘は名をお梶といい、この家の口取の下僕で和助という者の妹だつた、くりくりとよく肥えてはいるが肉の緊まつたからだつきで、いつも頬に赤みのさした、明るい、命の溢れるような顔だちである。口取りをする兄のそばに育つたためかお梶は馬の世話するのが好きで、近頃では兄の和助さえ「おれより上手だ」というくらい、すべてが手にいったものであつた。

「どうもよくないな」

厩から出て来た半之丞は、憐れみのこもつた眼で馬をみつめながら、平首から鬣のあたりを撫でた、

「せっかく晴れの馬場へ出られるというのに、……これではだめだ」

「なにかお催してもございますのですか」

娘は耀やくような眼で半之丞を見あげた。

お梶だけには半之丞はよく口をきいた、気が合うという

のか、娘が控えて諄いところがないためか、二人になるといかにも氣がるに話をする。しかし今はなにかしらこころ重げで、うんと頷いただけだった、そして間もなく住居のほうへ去っていった。

明くる朝はやく松野権九郎が訪ねて来た。

「おまえひどいやつだぞ半之丞」

相對して坐るといきなり権九郎がそう云った。

「昨日の入れ札におまえは自分の名を入れたろう」

半之丞はまじまじと相手を見るばかりでなんとも云わない、権九郎はもくぞう蟹のように毛の生えた手で膝を叩いた。

「おれにはちゃんとわかっている、十六枚の札が十五枚まで半之丞であるわけがない、断じてあり得ないことなんだ、なぜかといえばだな」

かれはにやつと笑った、

「なぜかといえは、一枚はいった松野権九郎の札はすなわちおれが自分で入れたんだ」

半之丞はびくともしなかった。

「おれの札をおれが入れたからには、おまえがおまえ自身に札を入れぬかぎり十五枚集るわけがない、どうだ、それに相違あるまい」

「念を押すことはないさ」ようやく半之丞がそう云った、

「百遍やれば百遍、おれは自分に札を入れるよ」

「一言もない、おれもたぶんそうするだろう、だがそれは

それとしてたのみがある、ちよつと庭へ出て呉れ」

権九郎はせかせかと座を立った。

「さあ……ちよつと庭までだから」

半之丞はしぶしぶ立ちあがった。権九郎は自慢の馬を曳いて来たのである、つまり競べ馬には是非その馬に乗って貰いたいというのだ。しかし半之丞が庭へおりとすく、表から新しい客が馬を曳いてはいつて来た。

「深谷どの、話ではわからぬから実物をごらんにいれ申す、この馬を見て頂きたい」

「待て待て」権九郎がおどろいて立ち塞がった、「おれが先着だ、おれの馬が済んでからにしろ、順番だ」

そう云っているとところへまた一頭、遅しい月毛を曳き入れて来る者があった。

そしてすぐまた一頭、続いて二頭、あとからあとからと忽ち十四五頭の馬が庭いっぱいになった。茸毛あり、鹿毛あり、白、栗毛、青など、とりどりの馬が犇めきあい、朝の光につやつやとした毛並を競って、あっちでもこっちでも蹄で地を蹴ったり勇ましく嘶いたりした。

「さあ、よく見て呉れ、こいつは風のようにとばすぜ」ひとりかそう云えば「まあこのすばらしい足を見るよ」と別の男が云う、

「そう眺めていたってしようがない、とにかくいちど乗ってみろ、ひと駆けすればこいつがどんな馬かわかるんだ」そんなことを口ぐちに叫びながら、みんな自分じぶんの

馬をうまく心を惹くように曳きまわしたり、轡を小づいて嘶かせたりした。

半之丞は黙って興も無い顔つきでその馬の群を見まわしていたが、やがてその眼が吸いつけられるように或る一点へいつて止まった。そのようすに気づいて人人がふり返ると、門をはいつた隅のところに、濃い栗毛のすばらしい逸物が一頭いた。

首の伏兎というところから背梁、腰へかけての高く逞ましい線、琵琶股から蹄へながれる緊まった肉付きなど、見るからに逸物という感じである。これほどの馬は本多家中にも数多くはない。

「ああ河内どのの馬だ」誰かがそう云うと追っかけて「見ろ、牡丹がいる」「河内どのの牡丹だ」と云い交わす声がつぎからつぎへと伝わっていった。それは老臣松下河内の飼馬だった。飛驒の産で牡丹と号し、かつて京の二条城で徳川秀忠の眼にとまって所望されたが、河内はどうしても肯かなかつたという由緒のあるものだった。

半之丞はしづかにそっちへ近寄っていった、そしてそばへ寄ってみておどろいた、その馬の口を取っているのは娘だった、くすんだ縞の布子に葛布の男袴を着け、余るほどの黒髪の根をきっちり結んで背に垂れている、見かけがあまり質素なので気づかなかつたが、こちらへふり向いた顔はまぎれもなく若い娘だった。しかも色のぬけるように白い、眉つきの秀抜な、少し眼もとに陰はあるが、ぬきん

でた美貌である。

「これは御老職のお馬ですね」半之丞はそう問いかけた。

「これを貸して頂けるのですか」

#### 四

「はいそのつもりで曳いてまいりました」

娘は大きく瞳いた眼で半之丞を見あげながら頷いた。響きの美しい澄んだ声である。

「お気に召しましたらお乗り下さいませ」

「貸して頂きましょう」

かれはそう云うと、娘の手から手綱を受け取り、目札をしてしづかに厩のほうへたち去った。

「つまりそういうわけか」松野権九郎が呻るようになった、「みんな帰ろう、馬はきまつたぞ、相手が牡丹では文句も云えぬからな、たんぼばやれんげは退散だ」

皮肉とも諦めともつかぬ言葉にみんな笑いだし、やがておのおの自分の馬を曳いて去っていった。

厩の前に立ってさっきから庭のようすを眺めていたお梶は、半之丞が牡丹を曳いて来ると「まあ」といって大きく眼をみはった。

「みごとなお馬でございますこと、伏見の競べ馬にお乗りあそばすのでございますね」

半之丞は頷きながら手綱をお梶にわたした。そして前へまわって馬の臍ひんのところを指で撫でたり、口の糠付を押し

つけてみたりした、馬は不安らしくがりがりと脇腹を震わし、首を振るかと思うと前足で地を搔いた。

「痾が強そうでございますこと」

「うん。少しこなきなければなるまい」

「鹿毛は口惜しゅうございましょう」

半之丞はふと娘を見た。お梶は妬ましそうに牡丹の横顔を見まもっていた。……病気でさえないければ鹿毛が出るどころだ、晴れの催しに自分の丹精した馬がお役にたたない、口惜しいというのは寧ろお梶の気持だったろう、半之丞は黙って眼をそむけた。

その日の午後になって松下家から人が来た。会ってみるとその朝牡丹を曳いて来た娘だった。

しかしこんどはあでやかに衣装を着替え、うす化粧さえしているの、すぐれた美貌が洗いだされたように耀いてみえた。侍女とみえる小女をうしろに、座へ就いて会釈をするとすぐ「どうぞこれをごらん下さいまし」といって娘は書状をさしだした。

それは松下河内から半之丞に宛てたものだった。披いてみると「伏見の御前馬競べに牡丹を選んで呉れて珍重である」という書きだして「……ついでには催しの日までの飼役としてむすめ阿市を差遣す、牡丹を今日まで飼いでたのは殆んど阿市ひとり丹精であるし、当人もたつての望みであるから、当日まで安心して任せて貰いたい」そういう意味のことが認ためてあった。

読み終った半之丞は娘を見た。娘は両手をついて半之丞を見あげた。

「わたくし阿市と申します、ふつつか者でございます」

「すると……」半之丞は書状を巻きながら、「あなたが牡丹の飼役というわけですね」

「さようでございます」

「そうする必要がありますですか」

「わたくし自分で手がけてまして、あの馬の性質も寝起きの癖もよく存じております、このたび伏見のお催しは大切なものと伺いました、もしその日までに調子の狂うようなことがございましたら、せつかく選んで頂いた甲斐がございません、それで是非わたくしに世話をさせて頂きたいのでございます」

はつきりと理のとおった言葉だった。半之丞はあっさり頷いた。

「しかしごらんのとおり狭い家で、あなたにいて頂く場所もありませんが」

「あちらのお長屋を拝借いたします」阿市はうち返すように云った、「そのつもりで手まわりの物も持ってまいりました、わたくしと下女二人、お長屋さえ拝借ねがえましたらほかに御迷惑はおかけ致しませぬ、どうぞよろしくおたのみ申します」

いかにも大身の育ちらしく、はきはきときめどこをきめてゆく態度は気持のいいほど爽快だった、半之丞はしばらく

く感嘆するように娘の顔を見ていたが、やがて「では支度  
をさせましょう」と云って立ちあがった。

長屋には三人の家士と和助兄妹が住んでいた。かれらは  
すぐに半之丞の住居のほうへ移り、そのあとへ阿市と二人  
の下の女がはいった。手まわりの物というのが馬に三駄もあ  
り、下女たちの持物さえ二駄あった。侍長屋とはまるでそ  
ぐわぬ大仰な荷おろしのありさまを見ていた家士のひと  
りが、「まるでお輿入れのようだな」と呟いた。

するともうひとりが、「本当にそうなるかも知れぬぞ」  
と笑いながら云った。

「なにしろ当時うちのご主人は娘をもった親たちの覗いの  
的だからな」「ではあの牡丹は婿ひきでか」そんなことを  
囁きあい、三人ともわが事のように昂奮した眼を輝かして  
いた。

少しはなれて見ていたお梶は、家士たちの話を耳にする  
とさっと顔色を変えた、そして逃げるように厨口のほうへ  
と去っていった。

## 五

深谷家の日常はがらりと変った。あるじの半之丞が無口  
なので、それまでは実にひっそりとした慎ましやかな明け  
昏れだったのが、阿市と下女たちが来てからにわかに活き  
活きとした空気が漲りだした。

毎朝はやく、殆んどまだ暗いうちに阿市が厩へあらわれ

る。あの朝のように、布子と男袴を着けた質素な身なり  
で、牡丹を曳きだし、美しい手を惜しげなく馬盥の水へ浸  
してすそを洗う。寝蓐を干すのも、厩の中を掃除するのも  
決してひと手は借りなかった、飼葉を与え口を嗽ぐまで、  
なにもかも独りでやる、「さあ廻って」「お足を挙げて」  
「ちょっと前へ」愛情のこもった、はきはきとした声で呼  
びかけながら、いかにも馴れた手つきで淀みもなく始末し  
てゆく、見ているだけでも気持のよい举措だった。

半之丞が朝食まえにいちど午後にはいちど、牡丹をせめに  
出で戻ると、すぐにまた阿市が受け取って揉み薬で汗を拭  
きすそを洗う、そして夜になり、厩へ入れて寝せるまで、  
まったく影のかたちに添うような世話ぶりだった。

半之丞はかくべつなにも云わなかったが、家士たちも和  
助も、お梶さえもそれには感嘆の眼を瞠った。

「とても大身のご息女とはみえぬ」「生えぬきの博労でも  
あれほどはできまい」

そう云いあいながら、しぜんとこの家の席を譲るかたち  
で、いつか深谷家の生活は阿市主従と牡丹を中心に動くよ  
うになっていった。馬の世話をするときのほかは、美しく  
着替えた阿市の姿が庭を往来した。娘らしい華かな声で、  
なにか命じたり笑ったりするのが終日たえない、どことも  
なしに香料の匂いが漂い、月の澄んだ宵などに琴の音が聞  
こえたりする。三人の家士たちもなんとはなく気に張りが  
でたようすで、起ち居が眼だつてきた。

「こうした変化のなかで和助兄弟だけがとり残されたかたちだった。病馬を裏の厩へ移してから、お梶は一日じゅうそっちで暮らした。表庭のほうで賑やかに話したり笑ったりするのが聞こえると、かの女は耳を掩いたいという風に眉をひそめ、唇を嚙みながら独りひっそりと病馬の背を撫でている、そしていつかしら口の重い、笑うことの少ない娘になっていった。」

徳川家の祝儀というのが公表されたのはその年三月上旬のことだった。予期したとおり、家康が隠居して秀忠が世を継ぐのである、そして將軍宣下が秀忠にくだったのは四月十六日のことだった。徳川譜代の人人のよろこびは云々までもない、恩顧外様の諸侯も京の二条城と伏見の城へ、ひきもきらず祝賀のために詰めかけた。正式の祝賀は五月一日からはじまることにきまっていた、一日に諸侯諸士の登城。二日に猿樂、饗宴。三日に勅使奉迎。四日に再び猿樂と饗宴、そして馬競べの催しは五日ということだった。

その知らせが桑名へ来たのは四月はじめのことである。改めてまた深谷半之丞と牡丹とが家中の関心を集めた。だした。

「おい深谷、きつと勝てよ」

「牡丹の調子はどうか」

そんなことを云ってようすを見に来る者が多くなつたが、こちらは例のとおり漠然たる態度で、うんともおうとも云わなかつた。

或る朝のこと、牡丹をせめに出た半之丞は、四日市までいった戻りに、薪を積んでゆく一頭の駄馬をみとめてふと馬を停めた。

「これ暫く待て」

なにを思ったか半之丞はその駄馬の口を取っている男に呼びかけた。

「そこに曳いているのはそのほうの馬か」

「はい、さようでございます」

農夫とみえる男はびっくりして頬冠りをとった、半之丞は牡丹からおりてその駄馬のそばへ歩み寄った。それはもうかなり老いているらしい、毛並の色も褪せ、四肢も骨だち、絶えず重い荷を負わされるためか、背筋脇腹などに擦り剝いた痕のある、なんともみじめな馬だった。半之丞は前後へまわって、ながいことしげしげと見やっていたが、やがて男のほうへふり返って、「この馬を譲って呉れぬか」と云いだした。

「金三枚まで遣わす、ぜひ譲って呉れ」

あまり思いがけなかつたのだろう、「へえ」といったきり男は返辞に窮した。

どんな愚か者でもこの馬と金三枚との比較はできる、おそらくからかわれるものと思つたに違いない、疑わしそくにこっちの顔を見まもるばかりだった。半之丞は面倒といいたげに、金囊から金一枚とりだして男に握らせた。

「桑名の深谷半之丞という者だ、馬を曳いてまいればあと



二枚遣わす、なるべく早く、できるなら今日のうちにまいれ」そう云い残すと、返辞は聞くまでもないという風に、再び牡丹へ乗って駆け去った。

男がその駄馬を曳いて来たのは、もう日の昏れかかる頃だった。まだ半分は疑わしげだったが、金二枚を受け取るとはじめて「夢ではなかった」といったそうな笑顔になり、自分のところ名前などを述べていそいそと帰っていった。

## 六

半之丞はその駄馬の口を取って、裏の厩へまわっていった。お梶はちょうど、もう恢復の望みの無くなった病馬の寝薬を替えてやっていたが、近寄って来た主人と、主人の曳いているみすばらしい馬を見てげんそうに眼をみはした。

「この馬を飼ってみて呉れ」

半之丞は持っている手綱をお梶に渡した。

「今はこんなになっているが、以前はこれでも乗馬だった、飼いようによってはまだ乗れると思うから……」

「はい」お梶はちょっと臆したようすで、「でも、わたくしに飼えますでしようか」と眩しげに主人を見あげた。

「おれも面倒をみるよ」そう云って半之丞は踵を返した。

お梶はそのうしろ姿を見送りながら、ぱっと花でも咲いたように顔を輝かした。もう忘れられてしまったと考えていた主人が、この駄馬を乗馬に飼いたてるといふ、おずか

しい仕事を自分に選んで呉れた。

「ご主人はお梶を忘れてはいらっしゃらなかったのだ」

そう思うと今日までの悲しい辛いおもいが一遍に消え去って、生甲斐のあるよろこびがはげしく胸へ溢れてきた。

日蔭ばかりの裏庭さえ、急に明るく灯が点つたように感じられた。

「おまえは仕合せ者ですよ」お梶は浮き浮きと駄馬に話しかけた。

「おりっぱなご主人に拾って頂いて、いまに御登城のお供もできるんですよ、でもそうなるにはおまえ自分でもしっかりしなくてはだめね、お百姓の家にいたときは違うのだから、……でも大丈夫、きっとあたしが凜とさせてあげます、あの牡丹にも負けないようにね」

話しながら、お梶は寧ろ自分のほうがよろこびに酔っているようであった。

けんめいなお梶の努力がはじまった。半之丞も絶えず見に来て、飼葉の選み方や量の案配をしたり、排泄物の具合をしらべたりした。馬は半之丞を見るとよく嬉しげに嘶いたり、そばへ寄るとなにか訴えでもするように首をすりつけたり、やさしく手を噛んだりする、自分には示さない馬のそういう愛情の表現をみると、お梶はつい嫉ましい気持を唆られた。そうされる主人への嫉みか、そんなに甘えられる馬への嫉みか、どちらともなくついかと胸が熱くなるのだった。